

東京都における平成 30 年度のスモン患者検診

亀井 聡 (日本大学医学部内科学系神経内科学分野)

小川 克彦 (日本大学医学部内科学系神経内科学分野)

里宇 明元 (慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室)

大竹 敏之 (財団法人東京都保健医療公社荏原病院神経内科)

研究要旨

東京都における平成 30 年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。平成 30 年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。受診患者数は 17 人 (男性 ; 7 人、女性 ; 10 人) であった。年齢は 15 人が 65 歳以上の高齢者であった。診察場所は、15 人が来所で訪問が 2 人であった。発症年は「昭和 40~44 年」が 10 人と目立ち、重症時も、「昭和 40~44 年」に多かった (8 人) (無回答 : 5 人)。発症年齢は 13 人が 25 歳以上であったが、2 人が 14 歳以下に発症していた (0~4 歳 ; 1 人、10~14 歳 ; 1 人) (2 人は無回答)。発症時の視力障害の程度は、視力低下の目立つ「全盲」・「明暗のみ」・「眼前指数弁」がそれぞれ 1 人であるのに対し、「ほとんど正常」と「軽度低下」が 11 人と多かった。歩行障害は 16 人にみられ、「不能」が 7 人と多く、「つかまり歩き」の 6 人が次いでいた。平成 30 年度では、視力合併症は 15 人にみられた。視力の程度では 11 人が「ほとんど正常」~「新聞の細かい字が読める」であり軽症例が多かったが、2 人は「眼前約 10cm 手動弁」または「眼前指数弁」の状態で見力低下が目立っていた。下肢筋力低下では「中等度」以上が 8 人で、9 人は「なし」~「軽度」であった。歩行障害は 17 人にみられ、不能例はなかったが、軽症の「独歩やや不安定」は 5 人で、10 例は介助を要していた (一本杖 ; 6 人、つかまり歩き ; 3 人、車椅子 ; 1 人)。外出は 16 人で可能で、「近く / 遠くまで一人で可能」が 11 人と多く、介助必要例は 5 人であった。体幹・下肢の表在感覚障害は 15 人にみられ、14 人は感覚障害の末梢優位性を伴っていた。触覚異常は 15 人にみられ (低下 ; 14 人、過敏 ; 1 人)、痛覚異常も同じく 15 人にみられた (低下 ; 13 人、過敏 ; 2 人)。下肢振動覚障害は 16 人にみられ、中等度以上の障害が 12 人と多かった。異常感覚は全例にみられ、中等度~高度が 15 人と多かった。異常感覚の内容では、「じんじん、びりびり感」が 10 人と多く、「しめつけ・つっぱり感」と「痛み」がそれぞれ 5 人にみられた。軽度の下肢皮膚温低下が 11 人に観察され、尿失禁は 9 人にみられた。「初期からの経過」では、軽減が 12 人と多く、不変は 2 人で、悪化は 3 人と少なかった。「10 年前からの経過」では不変が 6 人、悪化は 8 人になっていた。身体的合併症は 17 人にみられ、白内障 (12 人) が多く、他には高血圧症 (10 人) が比較的多くみられ、骨折と脊椎疾患がそれぞれ 8 人であった。障害要因は「スモン単独」が 5 人で、「スモン+合併症・加齢」が 11 人と多かった。療養状況は在宅が 13 人と多く、診察時の重症度では「軽度」/「中等度」が 14 人と多い一方で、「重度」が 2 人にみられた (1 人は無回答)。現在、治療は 16 人で受けていた (1 人は無回答)。スモンの治療を受けている患者数は 8 人で、合併症治療を受けている患者が 9 人であった。「最近 1 年の転倒」は 11 人

にみられ、「倒れそう」も3人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々外出する」が12人で、屋内で主に生活している5人より多かった。今回の検診から、発症時には、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。平成30年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかった。感覚障害は多くの例でみられ、異常感覚が全例で現在でも残存していることが明らかになった。更に、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

A. 研究目的

東京都における平成30年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

B. 研究方法

平成30年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。

C. 研究結果

1. 患者の内訳

受診患者数は17人（男性；7人、女性；10人）であった。年齢は15人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、15人が来所であった。

2. 発症時の所見

発症年は昭和40～44年が10人と目立ち、45年以降は3人、35～39年は3人とそれぞれ少数であった（無回答：1人）。重症時も（無回答：5人）昭和40～44年に多かった（8人）。発症年齢は20歳代/30歳代が11人であり、0～4歳の幼少時発症も1人にみられ、若年例が多かった。発症時の視力障害の程度は、高度の視力低下である「全盲」と「明暗のみ」がそれぞれ1人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が11人と多かった（無回答：1人）。歩行障害は16人にみられ、「つかまり歩き」～「不能」が13人と多く、松葉杖・一本杖・不安定歩行はそれぞれ1人であった。

3. 平成30年度の所見

(1) 臨床所見

視力合併症は15人にみられ、その程度では11人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」であり、軽症例が多かった。「全盲」と「明暗のみ」を呈した

例はなかった。白内障が視力に影響のないものも含め12人と多くみられた。Romberg徴候は8人にみられた。下肢筋力低下は15人にみられ、12例が軽度または中等度であった。高度麻痺例は3例と少なかった。下肢の痙縮がみられたのは6人で、4人は軽度であった。下肢の筋萎縮は9人にみられたが高度萎縮例はなかった。上肢の運動障害は6人にみられ、握力低下は14人にみられた。歩行障害は17人にみられ、「独歩やや不安定」～「一本杖」が13人で障害が軽度の例が多く、「つかまり歩き」が3人であった。車椅子使用が1人にみられた。10m歩行速度では、11人が15秒以上であった（4人は無回答）。外出では、「不能」は1人のみで、車いすなどの介助を要する例が5人にみられた。一人で外出可能な例は11人と多かった。上肢の感覚障害がみられたのは5人であったのに対し、体幹・下肢の表在感覚障害は15人にみられた。感覚障害の末梢優位性は14人にみられた。分布では、そけい部以下が6人と最多で、臍部以下の4人が次いでいた。触覚異常は15人にみられ（低下；14人、過敏；1人）、痛覚異常も15人にみられた（低下；13人、過敏；2人）。下肢振動覚障害は16人にみられ、中等度以上の障害が12人と多かった。自覚的な異常感覚は17人全例にみられた。異常感覚の程度は、高度；4人、中等度；11人、軽度；2人で中等度以上が多かった。異常感覚の内容では、「じんじん・びりびり感」が最も多く（10人）、次いで「しめつけ・つっぱり感」と「痛み」がそれぞれ5人であった。冷感が3人にみられた。軽度の下肢皮膚温低下が12人に観察された。尿失禁は9人にみられた。失禁の内容では、切迫性失禁が5人で、ストレス失禁はみられなかった。失禁の頻度では「時々」が7人と多かった。便失禁は5人にみられた。下痢・便秘などの胃腸症状は11人にみられた。「初期からの経過」では、「軽減」が12人、「不

変」が2人であるのに対し、「悪化」は3人であった。「10年前からの経過」では「悪化」は8人で、「不変」は6人であった。上肢深部腱反射は、9人が「正常」で、「亢進」が2人、「低下」が5人であった。膝蓋腱反射は、「低下～消失」が9人で、「亢進」が4人、「正常」が3人であり、「低下～消失」例が多かった。アキレス腱反射は13人で低下または消失していた。クローヌスが確認された例はなかった。バビンスキー徴候は3人で陽性であった。

(2) 合併症・治療など

身体的合併症は17人にみられ、白内障が視力に影響のないものも含め12人に発症していた。脊椎疾患は8人にみられた。四肢の関節疾患は7人にみられた。パーキンソン症候は1人にみられたが症状は軽微であった。高血圧症は10人にみられた。障害要因は、「スモン単独」が5人で、「スモン+合併症」が10人と多かった。「スモン+加齢」は1人であった。最近5年間の療養状況は、在宅が13人と多かった。「診察時の重症度」では重度例は2人と少数である一方、14人が軽度または中等度であった（無回答：1人）。現在、治療は16人で受けていた（無回答：1人）。スモンの治療を受けている患者数は8人で、合併症治療を受けている患者が9人であった。治療内容は内服加療が11人と多く、注射を受けている人はなかった。機能訓練は1人、マッサージは4人とそれぞれ少数であった。はり灸を受けている患者はいなかった。

(3) 主に生活状態（介護・介助など）

「最近1年の転倒」は11人にみられ、「倒れそう」も4人にみられた。一日の生活のうち、「ほとんど毎日外出」～「時々外出する」が12人と多くみられ、屋内で主に生活している5人よりも多かった。食事での要介助例は3人と少なく、14人は自立であった。3人で起き上がりに介助を必要としていた。トイレ動作は14人で自立であったが、3人は介助を必要としていた。入浴では7人が全介助であった。平地歩行では、7人が介助を必要としていた。階段昇降では9人が介助を必要としていた。更衣では5人が部分介助を必要とし、排尿時の介助は、10人は部分介助で、6人は自

立であった。「排便時の部分的介助」は6人にみられた。「介護の有無」では、「要介護」が14人で「必要なし」の3人よりも多かった。一方で「介護者がいない」例はみられなかった。身体障害者手帳では、14人が手帳を有していた。身体障害者の等級では、1級が1人、2級が4人、3級が7人、4級が1人、5級が1人であった。要介護度は、「要支援」が7人で（1；1人、2；6人）、「要介護」が6人であった（1；5人、2；1人）。

D. 考察

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。現在では、歩行障害の程度は発症時に較べ改善しており不能例はみられなかったが、感覚障害では異常感覚が全例で残存し中等度が多かった。外出可能な例が多かったが、一方で日常生活動作や移動に介助を必要としている例がみられた。スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

E. 結論

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。平成30年度では、歩行障害の程度は発症時に較べ改善しており不能例はみられなかった。感覚障害は多くの例でみられ、異常感覚が全例で現在でも残存していることが明らかになった。更に、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

F. 知的財産権の出願・登録状況

なし